

筑紫（九州）の万葉集と風景画シリーズ（第十一回）

ぼうさいばんか

「亡妻挽歌（大伴旅人）」

だざいふせいちようあと とふううあと

「大宰府政庁跡（都府楼跡）」

大伴旅人が神亀四（727）年末から翌五年春頃までの間と推定されている赴任の時期から奈良の都に帰った天平二（730）年冬まで大宰帥（大宰府長官）として在任した「大宰府」は、七世紀の後半から奈良・平安時代を通じて、九州を統治する拠点として、またわが国の西の守りとして防衛を、さらに大陸への玄関口として設置され重要な役割を果たし、長く都府楼の名で親しまれた。

・現在、特別史蹟として指定される大宰府政庁跡は福岡県太宰府市にあり、その史蹟の中心には当時の規模の大きさを偲しのばせる大きな礎石が残り、その跡を中心として門や回廊、その他の役所跡の礎石が復元され歴史公園として整備され市民等の憩いの場となっている。

大宰府政庁跡（都府楼跡）へは西鉄、天神・大牟田線「都府楼前」で下車し南へ約1km行くと大宰府政庁跡がある史蹟公園に至る。

（写生地1）大宰府政庁跡と背後に大宰府の北の守りとして665年に築かれた大野城跡がある大野山（現・四王寺山）を描く。（杏花）



◎「大宰府政庁跡（福岡県太宰府市）」の西南側にある「基山」きさんと南側にある筑紫の「古湯・二日市温泉」には大伴旅人がこの地で妻を失くし、悲嘆にくれて詠われた歌が残されている。

「基山」きさん

・基山は大宰府政庁跡（都府楼跡）から西南へ約八キロ、福岡県と佐賀県の県境、古代の筑前国御笠郡（現・福岡県筑紫野市）と肥前国基肄郡（現・佐賀県三養基郡基山町）みやきにまたがっている。

・基山は高さ四百四メートルの山であるが、山頂からの展望は素晴ら

しく大宰府政庁跡、大野山（現・四王寺山）、筑紫、朝倉の平野及び基山の町並を眼下に、さらに快晴時には博多湾や有明海、遠くに阿蘇山・雲仙岳などがパノラマで一望できることから眺望の山と呼ばれている。

・天智二（663）年、唐・新羅の連合軍に滅ぼされた百済の再建を支援するため、朝鮮半島に出兵した日本軍は、白村江の戦いはくすきのえで大敗した。

・天智四（665）年に唐・新羅の連合軍の日本への侵攻に備えるため大宰府を中心とした北部九州の防衛の一つとして、基山町の北西端にある基山の頂に朝鮮式山城「基肆きい（椽）城」じょうが築かれ、また、大宰府政庁跡（太宰府市）の北にある大野山（現四王寺山）に同時期に築かれた大野城と併せて大宰府政庁の南と北を護る軍事拠点となった。

・このことは【日本書紀】の天智四年八月の条には「百済の遺臣を遣わして、筑紫の国大野城及び基肆城きいを築かせる。」とある。

④基肆城きいが基山に築かれて60年余過ぎた神亀五（728）年に大宰

帥大伴旅人が妻を失ったことへの弔問をするために奈良の都から派

遣された弔問使（式部大輔石上朝臣堅魚^{かつを}）をはじめ、府の高官や諸官吏とともに「基肆（椽）城」に登り望遊した時に作った次の歌がある。

たちばな はなち

橘の花散る里の ほととぎす

片恋しつ 鳴く日しぞ多き

卷八―1473 作者 大伴旅人

（解説）橘の花散るこの里にほととぎすが鳴いている。そのようにひとりだけで亡き妻を恋い泣く日の多いことだ。橘を亡き妻に、自らをほととぎすになぞらえた悲しみの歌である。

この旅人の歌（卷八―1473）は式部大輔^{しきぶだいすけ}（人事一般を扱う役人の次の歌に答えて作った歌である。

き とよ う

ほととぎす 来鳴き響もす 卯の花の
共にや来しと 問はましものを

卷八―1472 作者 石上朝臣堅魚

（解説）ほととぎすが来て鳴き騒ぐ、ほととぎすに卯の花と共に来たかと、たずねたいが、それもできない。

（写生地）国指定の特別史蹟・基肆（椽）城跡がある「基山」がそび

える佐賀県三養基郡基山町は佐賀県の東端にあり福岡県と隣接している。基山町は基山山頂の南東麓に広がり古代から大宰府と西・南九州を結ぶ官道、江戸時代の長崎街道、明治以降では国道3号線・九州自動車道・JR鹿兒島本線が通るなど北部九州の交通の要衝の町である。

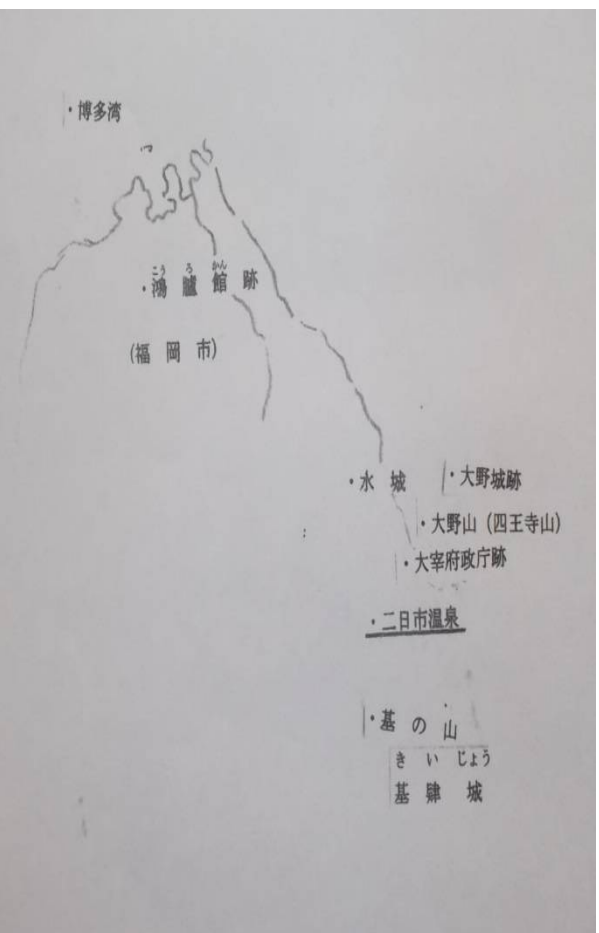
・JR鹿兒島本線「基山駅」で下車し西へ少し歩くと基山町のシンボル「基山」が西北に見えてくる。基山に向って約20分歩いたところにある基山町役場に隣接する基山町総合公園（基山町大字宮浦）から基山を描く。

（池田杏花）



(参考)

「大宰府政庁跡・基山(基肆(椽)城跡)」位置概略図



(参考文献)「九州の万葉」滝口弘 著「大宰府万葉の世界」前田淑 著等